

食品安全委、リスク評価候補を絞込む 白金ナノコロイド、情報収集を継続

食品安全委員会は7日、企画専門調査会第21回会合を開き、食品安全委が自らの判断で行う食品健康影響評価（自ら評価）の対象の絞り込みを行った。平成19年度の「自ら評価」の候補となったのは15品目。健康素材として人気の高い「コラーゲン」や「白金ナノコロイド」も候補に上がった。

「コラーゲン」には食品安全モニターより、「最近、女性の健康・美容ブームの中で、コラーゲンが肌を美しくするものとして人気である。摂取量の基準や身体へのリスク・注意等、正しい情報の提供及び製造者・マスコミへの指導を希望」する意見が寄せられた。委員から、「一般食品に含まれおり、食経験が豊富にある」「健食として過剰摂取や加工過程での不純物混入などの恐れがある」などの相対する意見が出された。検討の結果、コラーゲンは適正摂取されれば安全という認識は一致したものの、「からだにいい」という広告宣伝によって消費者が過剰摂取すれば、リスクは否定できないとした。た

だ、食品安全委は、「からだにいい」という効果の判定やそれをうたう広告に対する評価をすべき機関ではないことから、コラーゲン成分については、食品安全委がリスク評価を必要とする案件には相当しないと判断。「自ら評価」候補からはずされた。

また、「白金ナノコロイド」は、食の安全ダイヤルで「白金ナノコロイドをイオンから作っている」「イオン化された金などは体ににとっては毒」「安全性は確保できていない」など、ナノ食品に対する危惧が寄せられたことから候補とされた。欧米でも、ナノテクノロジー及びナノサイエンスから生じるリスクへの関心は高く、研究やリスク評価が進んでいる状況という。調査会は、食品安全委の「自ら評価」には取り上げないものの、日本としても取り組む必要を確認した。今後、白金ナノコロイドを含むナノテクノロジーに関して、各国のリスク評価や新しい知見など、幅広い情報の収集を継続していくとしている。

アガリクス・プラゼイ協議会、安全性対応コールセンター設置へ

アガリクス・プラゼイ協議会は11日、都内で臨時総会を開催。今後の活動内容として、昨年2月からの一連の安全性問題等に対応するコールセンターの設置や、市場で各加盟企業の商品について試買調査を行うことなどを発表した。

同協議会理事長の竹口雅之氏（働エス・エス・アイ代表取締役）は今後の具体的な活動として、小冊子の配布、コールセンターの設置、加盟企業の商品の買い上げ調査の実施等を挙げた。小冊子は、昨年1月の問題や科学的な用語の解説な

ど、漫画等も使って一般にもわかりやすく解説したものだ。現在制作中で、来月初旬には完成予定という。またコールセンターについては、現在食品安全委員会の評価待ちとなっている安全性評価の結果等に関して、協議会事務局にコールセンターを設け、問い合わせに対応できる体制をとっていくという。また、協議会の透明性を高める目的で、定期的に各加盟企業の商品を買い上げて安全性評価を行うという。竹口氏は、「今年2月に協議会で決定した安全性の自主基準は米国GRAS基

主張 ■ D&B展が示す癒し、ストレス解消ビジネスの将来

雨天をつけて開催された「ダイエット&ビューティー」展ではあったが、昨年比で参加企業も1割ほど増加し、大きな盛り上がりを見せた。新しいコンセプトの展示会であり、その先がどのように展開されていくのか、そうした質問も寄せられるが、「食品開発展」や「健康博覧会」と並んで、成長率の高い展示会の一つであることは間違いない。期間中、特定健診制度について講演された川口教授が展示会の模様について「気持ちが悪くなる、美しくなる、そういうテーマの器具が並んでいる。運動が大事だが、運動がしない人、ランニングマシンやウエイトトレーニングは抵抗があるかもしれない。ニーズを捉えた商品が多い」と参加商品について感想を述べられていた。

このお話を伺いながら、『病気になる人ならない人』（土橋重隆著）を読んでいる、少し見えてきたような気がした。土橋先生は外科医で長く最前線で活躍、「西洋医学が治せる病気はそれほど多くない」と言い切り、「治療の主役は医者ではなく患者さん」とし、全国で講演活動を繰り返されている。著書のなかで、病気にならない人の特徴として「いい加減な人」をあげており、皮肉に

もその対極である「健康へのこだわりは予防役に立たない」と恐るべき調査を紹介している。右乳がんと左乳がんでは違うストレスがあるなどとし、病気の原因を探ることが大切だとも言った。

エステやスパ、足裏マッサージに岩盤浴、あるいは振動マシンのようなものに人が集まっているが、（検測できないのではあるが）、温泉に浸かり、マッサージを楽しみ、体にいい食事というよりも雰囲気を楽しみ、そういう生活スタイルを積極的に、病気にかかりにくい環境をつくることしたら、それは現時点でオーソライズされていないけれども、予防マーケットの大きなヒントかもしれない。

展示会場ではソープ分けはしているが、各社がこれこそ一番というような自慢の商品を陳列し、商談が繰り返られていたが、病気にならない手前のストレスコントロール、リラクゼーション、あるいは癒しに、こうしたビジネスが貢献しているのだとすれば、医療費削減を掲げてスタートする特定健診制度やその先の医療費削減にも貢献できるのかもしれない。そんな思いで展示会のこれからの姿を考えている。

準に匹敵する厳しいもの。昨年2月18日の『発がんプロモーション作用あり』の報道は、キリンウエルフーズ社の製品だけが問題であったということを理解していただくよう、アピールしていきたい」と話した。

同時に開催された講演会では日本補完代替医療学会理事長の鈴木信孝氏が講演した。鈴木氏は日本における代替療法の

利用率が65.6%あることを紹介、「その内訳はサプリメントが42%と圧倒的に多い。国民は食・未病に関心を持っている」と説明した。

医師でもある同氏は、医療従事者の関心事は最終商品での安全性。アガリクス・プラゼイ協議会の自主基準は米国のGRAS基準に似ており、非常にレベルの高いもの」と評価した。